荷祢

五 くら 并一

哥と詞を名ごきわ

[v. 23]

PL788
.4
.G4
1654
vol.23
copy 1
Asian
Japan
cage

2004551302

保氏丈六丈の正月のまき

年かへるあしこれぞこのなしき名残おしく
くもるぬらくげさには殺すなる網の中にて
ゆきまれ草のやうにしづきそあいしうや
なしみじろ露は末のあもおりをのびくへの
ちるもののびくりきぞこのかうしおしていとどたま
とぶけつおまへは庵よりもじめこ家おほくかぐさ
まつのへるれくにぐのありさ夜はまのびくそんもこ
の葉かるまゝくあるん芸の花くだのおまへよりか
て梅の香もこ寺の内宮いるかきまちひていけり
仏のこゝくまでおほけゆきみすずは打とけてやすくうさ
頼みしのへりさまかふ人ぐもけふやうきそぐれ

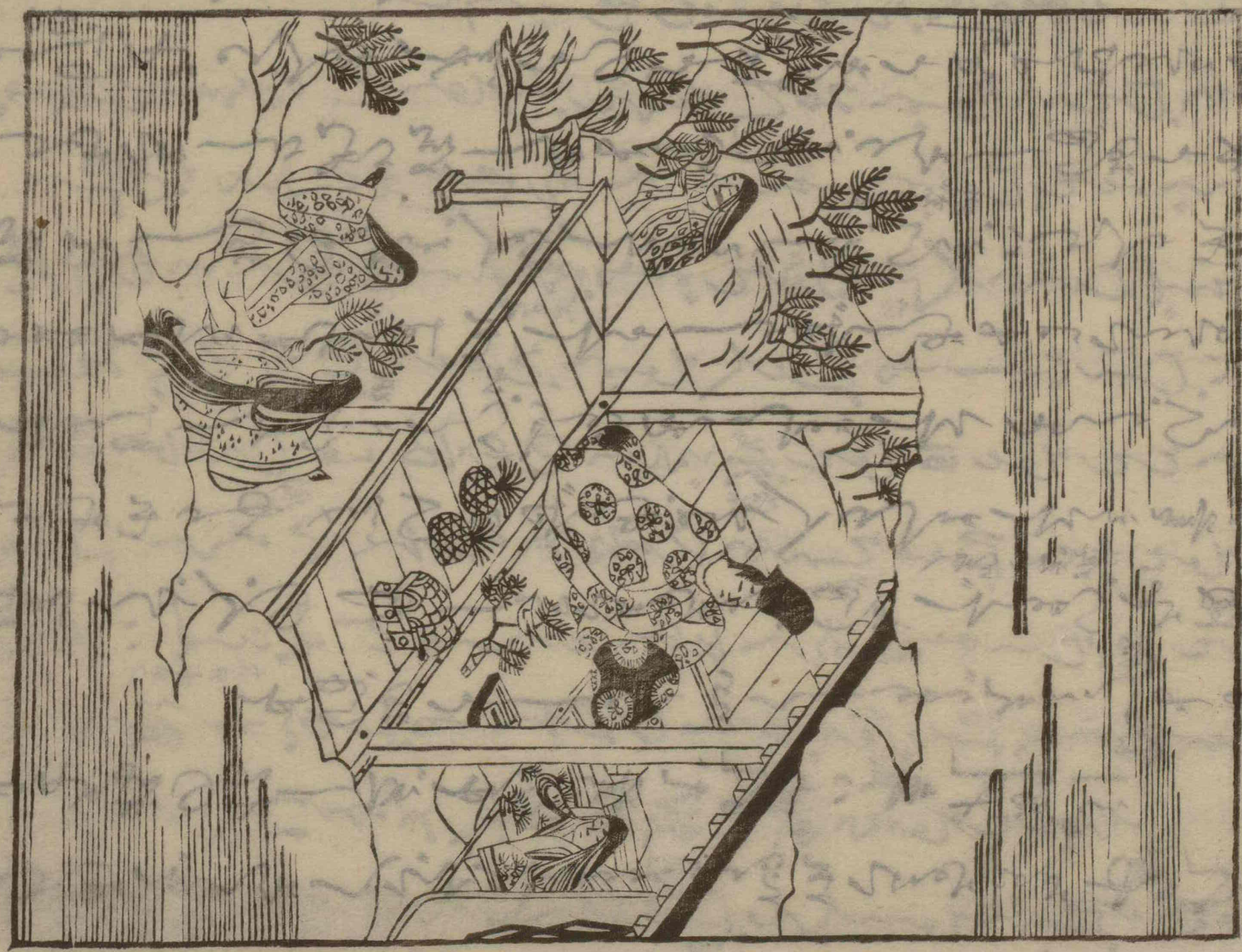
ムツ子一

ころを娘(ゆゑ)君のれうこまとしをめて。すそしおと
あひこうぐり。中くよしくしく。さうぞく
有さ海よりもじめて。めやすくもてつけて。実りし
こまむきぬつく。もぐらめれいもひして。もち升
ぐ三代さへとりよきて。手手のげりしるき。
としの内の税(いそひ)ごとだして。そぼれあへるに。(源)おとゞの
君さしのぞきあへれば。(おぐらぎ)あところぐらしなをしつ。
いともしくあきけぎられとまびあへり。いと(源詞)しくるか
あるこづくのいもひごとゞもなかこなをのくしふ
ことのあれあんうし。すそしあるをよや。我(日れ)ことぶき
さんとうちけひあへるれありさ海をどしのちゞ

めれときこえさせてまつる。けれはとほゝゑみおはする
中将の君ぞ。かねてぞ見ゆるなどこそ。鏡の影にもかた
らひ侍りつれ。わたくしの祈はなにばかりのことをぞ
なと聞ゆ。あしたのほとは人々まいりこみて物さは
がしかりけるを。夕つかた御かた〴〵のさんざし給
はんとて心ことにひきつくろひ。けさうじ給。御
かげこそげに見るかひあめれ。けさこの人〴〵のたは
ぶれかはしつる。いとうらやましく見えけるを
うへにはわれこそ見せめとて。みだれたることゞも
すこしうちまぜつゝ。いはひきこえ給
うす氷とけぬる池のかゞみには世にたぐひなき

あまさかげそあるしべる。げ(比)よめでこきれあるひだあり
くもりあるき池の(紫)(ゲミ)に万代をしむべきかげぞ
しるくこしける。何(比)ぞすまつけてもすゑと紙きれ
繋りをおしまれしく罪しかしぬふ。(元日子日之)ふ子乃
日ありかり。げまちしきの妻をかけていたくむに。
ことかりある日あり。姫(昭右)ぎこの御方に(添ノ)つる里ぬ人
れハつしハしもげへちどおまへの山の小松引
あそぶつき人ぐの心ちども。(とき)垂どころなくこ田ぶの
(昭右上)おこぐより。つぎとがましくしあれ見えるひげ、
どもつりごあどなれぬへり。えなしぬ。みえうの枝に。
しけれる言もせふころあしんり

昭年月を松にひかれてゆく人にかふ鶯の初
音きかせよ。とゝきぬさとのと罵ぬへるを。げに（源心）
衣とおぼしたり。こゝいとも云ひ給はぬかしきなり。
此（詞）れかへりは。こゝげ（姫宮にと云）かしきてゆへ。ちかしこ給
べきうにもあらずかしとて。れすぐるとうまり
ちひかしをこそまつしをぬふ。いと（地）うけ（姫宮ノ）けして。
明鶯こそまつ人ぐるあらずさひ罵ゆかれあり
さ雨を。いまぞ（姫宮と昭君ノ）おぼつかなきこし月のへぐ〻ゆけ
家も。つこえ（源）がましく心ぐらしとおぼして
引別れ（姫宮）年ハふれど鶯のまゝ立し松の孫なれ
とれめやおさなき（地）れ心にまかせてぐぐしきぞあめる



夜(添ム)のれ(花ちる之)せまゐをこうまんぞとさなるぬけ
まやいとしげかなこえて。つぎとこれましき
こともなく。あてやかなすこなしぬへるけりひ
こえつろ。せ(地)し月なそんて。れ心の陽(ぎ)てもなく。哀
なるれなるしひなり。今はあれがちまちかやかなる
れ有様なもてなしきこて。給はざりそろも。いとひつ
ましくありがたかんいもせの契ぞかりきこて
うたしぬふこさ帳へぞそこれど。すうし(添ノ)をしやり
うまへば。まるさ(花ちる)ておりす。ちるゝ(衣裳と云ヘ)はげに匂ひ相かれ
あるひまて。れぐしなどもいてくさりゐまかり。
やさしきうなあるのどえびかづらしてぞ。つゝ

ろひまゝべき。我(添ム)ならざらん人ハこゝざめしぬべき
れ(花ちりノ)ありさ夜をかくてこゝろこそうれしくほいあれ心
がろき人のつゝまれにそむきなひなまゝしかば
など。れ(地)對面(さめん)のありくまは。先(まづこゞ)我れ心のながさも。人の
れ心のともれをもうれしくこゝろやうなりと思し
なり。こ(添)まやかまふりとしのれ物語などなつかしく
きゝくなて。かしのこゝ(むづ)いへ(添ノ)ゆゑ。まゝ(ム)いこゝろも
す(忍)こなれ給ちぬほどよりハけたひおしくたゞ
たておしげなりいつゝ人のすゞこなまめかしく
人がげのあまるゝたてれ志つゝひあるべきなりなれ世
こ夜やうなりれでうどハいとしもとくのへ給ちぬ

をさかくに抱きよげにすこしなしかへる。ぢうじ（むと云へ）
こもおれおりしげとかとこえて。やまづきにまて
ちやしのへるれかうちなどいと茶やうに。こくう
くもれりとこゆり所なく。ゆ夜なく匂ひきらくきく。
こ夜ほしきき夜ぞ志のへる。抱（むノ法ハしまてくす）きひにしげこのへる。
程のきまぎにやかこのすそきこうほそりて。さぢら
うにうれりしもいと抱きよげに。こうしこいと
けぎやかなりき夜しこまへるをうくてこぎらまし
うぎどおもほきにつけてハえしもこきてぐし給
まじくやくいとへぞそなくこえて。まいりを給
へど。程ちふまへ（むノ）ぐるをおほくあやしきがうけく

の心ちも忘給ふ○が。おほかたならずもてなしきこゆるも。
いとおかし。さしばはありめる心ちして。こなたも心
やすくはいかなるひめうをいひ。こゝろくまてあそびて。
あやしくあづまもつかりのまへ。いしつけあそびうゐる
琴ゐまふひとも。おめかを。まろとも。こそあそし
あへうさろめく。おもいけき心もうら人なき宗
ありと寄てのへ。の給ひんまてはしそとこえて
まさと。おうこしぞうし。箏ぐまある行はおもしの
けるはつかりのまぢうさつゞとの声なきしわ
ちらり。うすのうちのさひ風。あまめしく吹まれ
りて。撫まりしとはけるくあそばさう。きこしじこれ

こゝ手いづくとこまりしこまふまずりのあるを
まぎりしく。さうしぜとりちしうをさりけく
こゝのふかしのさうぎやうきのごとくしさ。ちし
さしうしとれまあしげるうきんうちをさ。を
ざとめさよしあり出をけまじ（たさ抑ノ名く）うをくゆらりして。
抱ごとましめうこ。えびかうのれまが魚ないと
えんなりてなしひどものこゝぶれうちとけうもすぢ
かえり。ゆへあるかきぎ海ちりごとくしをさう
がちなどまもざれ（えイ）うずめやすくかきすきひうり。
小松のれへしをかづしとこけるまゝ衣
ちるゝかうことにもかきまぎて

めげしや茶のねぐしままづひてうる乃
かうす伐とへる鶯声狗いでうりなどもあるとさ
けりをうべる家しあれバなど。ひきくへしなぐさめ
うりすぢなど。うさまぞつありをとりてうさまひ
つ。ほ(比)ゑ。ゑへるまづしげなり。少(ほ)でさしぬら
してうさすさ給ほどにぬ(ぬ)ざるを出て。さすがに
力づくのまてなしハ。こまりをさて。かやすさ
よういなりを。れ(ほん)人よりハことなりとおぼまて。ぬ(ね)ろさ
に。けぎやうなりうこのうしゆのずうしさぢしかな
ほどにこ。うすしぎるけりも。いとゞな海見りし
さそひて。なつしかれバあたしきさしのれさも

がれもやとつましけれど。かゝるはとまりかゝれ。
おぼしにあるうしと。ぐ〳〵は心をとめて おぼさ。
地 これこのおとゞまはませて めで海しが人べきて。
ままおけばのほどはつり給ぬかうしもあふ
まじさ哀かきぞりしと思ふは。うらやまもくぐ
なしずあられはそふ。まのちさりすまへるそるなる海
けやそしと思ばまべあるゝ心のうちさしれおゝて
詞 おやたさゝうくれなまして。うらくしうやまけふ
いざゝるまき浅さしもおざゝうじ給まてどれ私家
とりのふも。地 おしうこと。こしちるゝれいへんもうけ
れバ。ウヅつりしてぞ〳〵しし〇さし川。日ころくおほ

とのごまりおきたり。地ふまゝまんじきやくのことは。
（添ノ）まがさしりてぞおもがくし給。上達アそこゝちなど
例の詠りなくまいりなへりれあそびありて。川出抱
ろくなどはなし。そこしのどひなへるが。紙もをとら
じともてなしなへる中にもすこしなずらひなる
ぶまえし給ひぬもれかれ。ぎりもなちてはいりそく
おほく抱き給ひなれど。（添）れまへそはけ紙されなふ
もまろしかし。何のかずなるもぬきもべどもなどぶる。
（六条院）この院にまいりには。心づかひことなりなるまして
ひかやかなる上達アなどは世ふ心など抱しなひて。
すぐろに心げきりし給ひしつゐのとしこゝろもと

ことなり。菅の香(か)さそふ夕風のどうに打吹こうり。
おまへの梅やうくひもとさて。おれハ雑(れ)どさなる
ま。他のしらべもおもしろく。このとれうち出たる
ひやうしいと菅やうなり。おとじもとさぐこ思
おそへのへる。さきくさのすゑつゑいくなりし
うめでこくさきも。なるまごともさしいくへ志給れひ
りまもやされて。夜をも春をもますかぢめことゝ
なんワれけり。うくのしろ馬車の春をも。もれ
へぐそ罕のふれうるぐハ。もちもの中の世界(せかい)り。
まぐひしけざんぬちもうくやと心やましげなり。
ましてひんぐしの(東陵之)院まもなれのへるれうるぐ(まつむうつせとうどく)ま。

年月にそへて、つれぐの数のミまされど、世のう
き先ミしぬ山路(ぢ)にあもひなずしへて、いれなき
人の此心をがおもはとりはミえて、まいりまとがめん。
その外の心もとなくさびしきとぢるなれば、
をこなひのるの人(うつせミ)は、そのまぎれなくつとめ、かれ
のよろげのさしのがくもん、心にいれ給もん
人(まつむ)は、まるそのねがひにしたがひ、拙まめやりにもう
ぢしきをきてまも、ろぐ心のねがひにしたがひ
にしたがすねなり、さは(涙)がしき日代迄してつたり
のへり、ひたちの気のれ(まつむ)かるに、人の程あれぞ、ろろ(涙ノ)
ぐりしく見して、人めれかぎりぢりも、いとよく

まてなしきこゝ給いまつむ人さりとこゝえしれ
つゝ婆こもとしばにおとろへゆき。まして[illegible]
よどこゝろづしげちかれりこゝもしらめるどをいと
おしとおぼきば。まほにもむかひ給ちぞ。やちぎは
げにこそすき面じかりかれとこゝゆかも。きるしのへる
ひとぶら此べし。ひかりもなくくろさかいねつまし。
さひぐしくちりくりひとうれ。さるをりもれく
うちきをさ給へ家いとさむける心ぐらしかされ乃
うちきなどいかにしるしくりかあらん。れ
もれの色ぞかり。霞にもまぎりまじく茶やかるに。
れ心にもあらずうちなげれまて。とさうにこゝさ

怯ひきつくろひ備(でぞ)ぬふ。中(地)々(まつむ)外はさしもおぼし
よらず。今はかく衰まながき(ほノ)れ心のほどをおぼしき
拙ようちとけられそまゐるれ。さ度あれ
ありがたかるまもをしなべての人なるぞ。いと(ほノ)
おしくなるしき人のれさ度とおぼさば。衰まわれ
ぶまこそそと。れ心とじめうまへなもありがたき
ぞかし。れ(まつむノ)こ急なごもいとさむげ。うちまゐき
つくらひきそ給。うまづ(ほノ)ひぬて。れ(詞)ぞどもれ
ことうしろまゐる人は給るやかく心やすき
れすまねをぶいとうちとけたる度ま。ふくを
なへたるこそよけれ。うるべぐりつくろひたるれ

よろこひハおほくあんと思しめへバ。こちくきく
きすゞまけゝひおそて。醍醐の阿闍梨の君のため
うひしゆりとそでをめだきえめひゆしてあん。うらぶ
ぬれをさへかられまし後。さむく御と思しめすハいと
それおもきれをうとありそう。心うりしといひ
あかし。おまりうちとけるところと思ほさど。さてまそる
いとまめまゝずくの人まておかす。うかぶめそいとう
うし山かしの君のあろ衣よゆづりおそてあへあん。
きそはいさうりあまさ姫の衣いあへまもちかどう
まさ○紹はゞらん。さろべきおらくはうちつきれ
さらんこともおぞろりしあへうし。あとよろきおれ

おれしく。ふ面さ心のをとりよ。ましてうるぐの
肉ぐらりし紀をきひよも。をのげうしあんとのおひ
て。むりひの侍のこうらあけさをて。こゝめあやなど
ましをおふおれこう所もなけれど。すこ給りぬ所の
けるひはしげりまて。おまへのまぐちぢりぞいと
面しろく。紅梅の咲出たる匂ひなどこそやまへも
なさなこうしまて
（保）ゆうさくの表の手ぐまにうづ○をてよのつる○
なしぬ茶をこうれ。ひとりぐちまへど。（せ）ゆ丈しり給
そぐらまくりし

空蝉のあま衣にもさしのぞきぬべり。うけぐりうろさ海
にはあらず。がぐやかなつぼ○ずこましなして。仏汁に取え
をなりて。とこなひけとめけるさ海衣にこそて。雑仏の
がぐり。たうなくしたるしうろ閼伽のぞなども。おしげに
な海めしく。れ心ぞをありとこ海ろ人のけりひなり。おを
よびの車。心ぞ人おしさまいたくねかれて。袖ぐち汁
ぞ気ことなるしもなるしかれば。洞ぐこなて。松がうら
しまに。たうかなしひてぞやこぬべかりけり。芳より心う
かりけり此歌かれ。さすがなかがりのむつびは海まじかり
けりよなどの給。おまだも抱あれなるけもひにて。
うろうなにこれを写しさすらしもなん。おさくハ

あらず心なへ志られ行けると字也。つねよ（添詞）ありく。
うさ○て心まどりし給し。世のむくひなどを。仏は
りしてまり字ゆるこそくるしかれ。おぼし志るや
くいとするをましもあらぬ也。とひあるを
なふこともあらじやうとなん志ふとのなふ。皮（うつせみ）あさ
ましかりし（紀写がふけさうしてるべ）世のつることをさきなへるなめり
と。たづしく。（詞）かうあり古殿を。ゆくんじとて
らるゝよりほかれむくひハいげこまう侍らんとて。
ことまうちなるぬ。いふ（添ふ）しへよりも物ゆくまづ
りしげさまさりて。かくもてなれうることなおぼす
志も。そもなるちがくなおぼさるれど。ちるさこと代

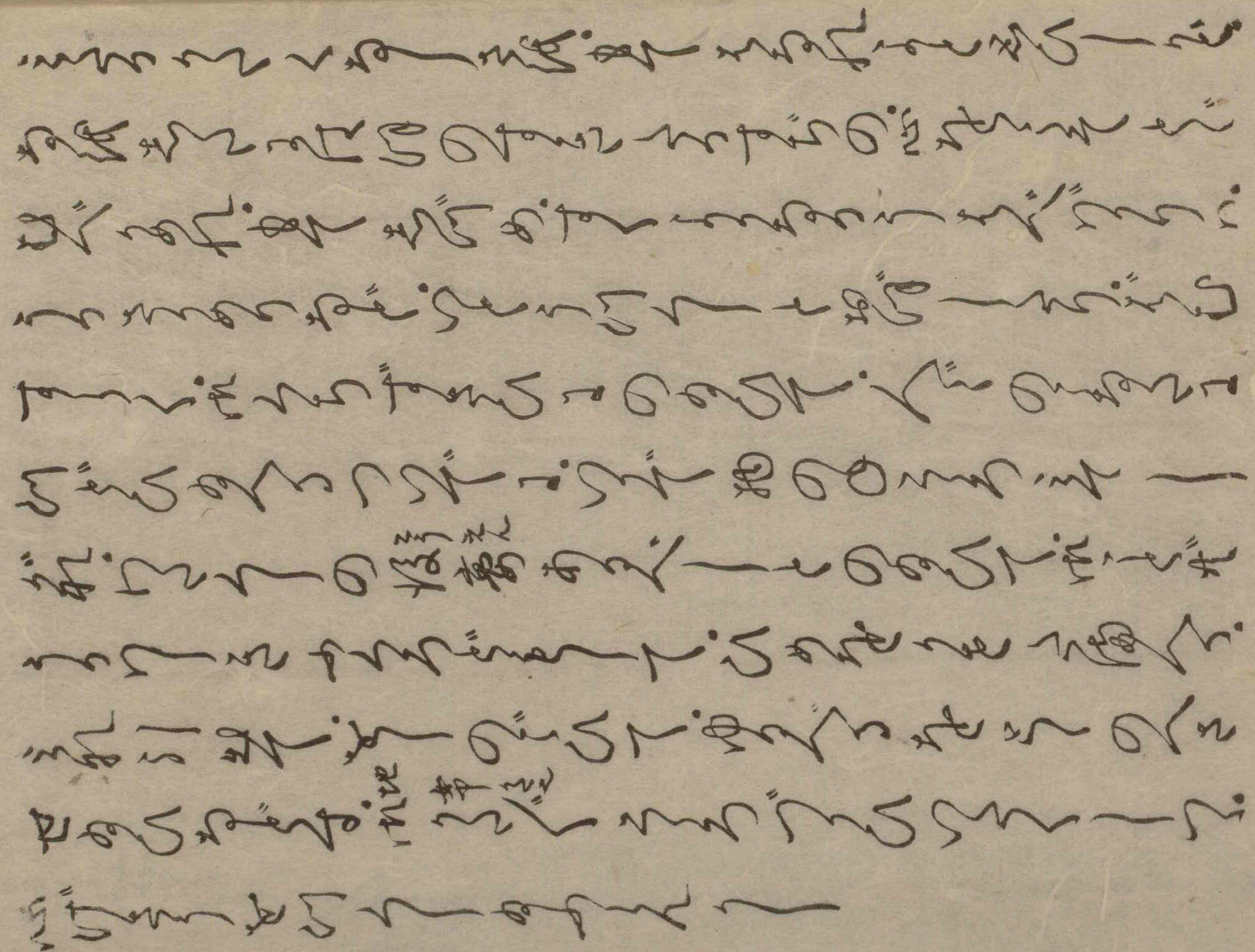
のさまひかくべくもあらず。大かたの勢今の物語を
志なて、かぐらりのいふかひごとあれりしと。あなたな
こやつとなふ。やうまてもかげよかれこなか人ご
おほかり。これさしのぞきつくしなて。おぼつかなき
日かずつもりおりくあれど。心の中はをこそしぞ
なん。こゝかぐらりあるこちの。別のこそうしろめた
かれ。食ぞ志しぬなど。なつしくの語。いづれをも
猶くまつけて。おくれとおぼしこう。我はとおぼし
あがりぬべきは男のほどなれど。さしもことく
志くもてなし語りず。所まつけ人のほどまつけり。
あまもくなつしくおりしませば。こゝかぐらりの

れうろまうなてなん。おほくの人ぐ年月をへ
けり。ことしハおとこぐうかあり。うち(門裏)より出雅院ま
まいりて。つぎに山(六条)院にまいる。月の程をへて。夜の
明ぐるに女にかり。月のくもりなくすみまさりて。
うす雪すこしふれる庭のえなるぬに。殿上人なども。
ものゝ上手(ざ)おほかるころほひにて。ふえの音もいと
おもしろくふきたてく。このおまへ(源ノ)いことにころづ
かひしたり。れうるぐ抱えにつゝみ給べくゝ。
てれ(源)をうそこどもありけれど。左右(さう)のたい。わた
愛なるゝに。れつぎ。しけしおもしと。よしのたいの
姫(ム)君ハ。寝殿(しんでん)の南のれうるにつゝりまて。ゝなるの

ひめぎみまれたいめんあるかり。上もひとこころ
おりしまをば。こ木帳ぞうりへぞこしてきえこまふ。
茅薙院。さきいの気のれうるなどめぐりけるほどま。
夜もやうくあけゆけば。こげむまやまて。ことそ
かをぬべこさ紙。例あることよりほかる。さ海ことま
ことくさんて。いうじくもてもやきをかふ。新すさ
まじき曉月夜ま。雪はやうくかりつむ。松かぎ
木ぐらく吹おろし。地すき海じくもきぬべき程ま。
あを色のるんぞめるま。ちらがさねの気あひ。なまの
かぎりかはこゆる。かぎしのうるはかりほひもなき地
なれど。所からまやおもしろく心ゆき。いのちのぶる

ほどなり。夜の中(ヲ)ねの君。内の大(は)夜の公遊。そこらに
もぐれてめやすく。夜やかなり。ほのぐと明りに。
ゆきやちりて。そぐろさむさまに。しけがはうちひて。
かよれりすぐるなりしき声ごの。絵(ね)りをかき
とめがたからんこそ。くちおしけれ。ぬかるぐ。いづ
れもいづれも。おとしぬ袖ぐちどもこぼれいでたる。
こちたさ。もれいろあひなども。あけぼのそこに。
雲のましきこちぬ出まけり。霞のうちかとミつたさ。
あやしく心ゆくこゝもれまぞありけり。さらいかう
ぐしのよぞなれたるさ海。ことぶきのこぐりがりし
きぞあきたることもことくしくとりなし

ころ中くなまぢりのおもしろうべきひやう
しも罪ぬ物を例のけらづきけりてまうでぬ。
夷あけたてぬれば此ゝ人ぐ屋をけるを給ぬ。
おとゞの君すこしおほとのごもりて目こうく打さ
ゐ入り中ねのこゝ君ハ辨のかねり（ぬ ノ子息後ニ右衛門大夫と云ヘ）おさくをとら
ざめりハおやもしくいふそくども。おひ出り此ほひは
こそあれいかしへのひとハまことよりしこさか
こやもこゞれこうこともおほかりけん。なさけぶろ
すぢハこのごろの人まえしもまさしぐりかんし。
中ねなどをばすくしきおほやけべまもなし
てんとなん。ちひ垂てし。月げ（ほノ）ゝのあざれだ



こゝろかくなしさ氏。もてもなれよとゑひしかど
なほ志るこは田のすさこゝろすぢの心をこそとゞ
むべかれ。もて志げめ。すくよろなうもべがりは。
うろさゝめりなどいとうけくしとおぼしらぬむ
すゝくれくちずさひこのゆひて。人ごのなるこ
けどひゆへるついでこいでゆ。のゆゑ。こゝろこそし
がれ。けるくしの後(こうえん)夢あるべしとのゆひてれことだ
うりしきかくろどもして。ひめをかを。こ海へ。
これ引出て。そしのごひて。ゆるべるをとしのへさ
せゆひなどす。れ(地)かるぐ(帯)こゝろづひいくしつ。
心げさうせけくしゆゑんし

69038
6AP78